

“cross over” することができない過去

Moses, Man of the Mountain における歴史と民族

志水 智子

序

この作品において、エジプトの王族として育ちながら、ヘブライ人ではないかとの疑いをかけられた Moses が、エジプトを捨て紅海を渡るシーンでは“cross over”するという言葉が繰り返し用いられる。だが彼がエジプトやヘブライ人とのつながりを“cross over”できなかったことはストーリーの展開を追っても明らかである。この場面において、人間は自分のルーツとなる民族の歴史や過去とのつながりを“cross over”し、それを断ち切ることはできないという示唆が読み取れる。

この物語は、民族の団結と自立、国際的アイデンティティーの確立や文化的発展をめざす過程を描いている。Moses は、指導者として民族に誇りとアイデンティティーを創出しようとする。その過程において、リーダーの自己実現欲と献身によって一つのフィクションとしての「正義」とそれに基づく歴史が創作され、残されていくメカニズムが読み取れるのである。本稿では、Moses が“cross over”すると強調して描かれながら、“cross over”することができなかったものが表象する、Hurstun 自身の民族と人種に関する意識を考察していきたい。

I Moses の民族性の曖昧さと修正主義的民族性

旧約聖書における Moses とは異なり、Hurstun がこの作品において描き出す Moses の出自は意図的に曖昧にされている。Miriam が川で見失った赤ん坊が本当にエジプト王女に拾われ、その息子として育てられたかどうかに関して、確たる記述はない。Moses は自分がヘブライ人であるという確たる証拠がない上で、ヘブライのリーダーになることを決意するのである。Moses の民族性が曖昧であるという設定は、人間の遺伝的な民族性がある民族集団への帰属意識を決めるのではなく、どの民族性を選択しアイデンティティーを見出しているかによって人間は選択的的民族性を身につけているということを示唆する。多文化社会アメリカにおける人々の民族意識の一端を Hurstun は描き出していると言えよう。

一言にイスラエル人といってもさまざまな部族出身のさまざまな価値観を持った人々が集まった集団であることや、その集団で一つの国を作ることの難しさを語る Joshua と Moses が抱える問題は、そのまま多民族国家アメリカが内包する民族問題であると言える。とりわけ奴隷状態から民族の誇りへの自覚を目指すまでに至るイスラエル人のたどる過程には、アメリカ社会における自由と権利を求めたアフリカ系アメリカ人の戦いの歴史が重なり合う。Aaron や Miriam と、Moses との価値観の違いは、同じ民族であっても友好的であるとは限らず、団結できるとは限らないというアフリカ系アメリカ人社会の一面を示唆するのである。そして神の命令とはいえ、自らの遺伝的な民族性によってではなく、自らの意志によって民族的アイデンティティーを選択する Moses はアメリカという国が宿命的に抱える修正主義的民族性を体現すると考えられるのである。

Moses はその後の生涯をイスラエル人とともにすることになり、また生物学的な真偽はともかくとして「親族」である Aaron や Miriam との兄弟関係も終生途切れることはない。Moses が“cross over”することができないエジプトにおける人々との関係において、人間がその歴史や自分が意識する民族性から自分を切り離すことは不可能であること、また自分が選んだ民族性や過去に対して何らかの果たすべき責任があるとの示唆を読み取ることができる。

II リーダーとしての Moses の苦悩

エジプトからヘブライ人たちを連れ出し、紅海を渡すことに成功した Moses はその後もリーダーとしてさまざまな試練に遭遇し続ける。そこで次に Moses がリーダーとして“cross over”できないものを検証することで、多くの人々が一つの“my people”となることの困難さ、他者から提案される理想ではなく自ら新しい価値観を見出し、因習から脱却して「内なる自由」を獲得することの難しさについて考察していく。

Moses とイスラエル人の集団は、武力によって他国の主義と信仰をねじ伏せ、イスラエルの神と国家の理想をより強力な歴史的フィクションであり正義として勝者の視点からの物語を創出しようとする。神と Moses が創出した恣意的な物語を厳しく押し付けられるさまざまな価値観を持ったイスラエル人たちと Moses との間に距離が生じていくのは必然と言えよう。

Moses は自分が信じる理想の実現のために一つの物語としての「正義」を全うしようとする積極的側面を持

一方で、消極的側面としての迷いも持つ。エジプト王との交渉の場面や、アマレク人との戦いにおける両腕の役割において、Moses が魔法を使う能力がある様子が描かれるが、このような超自然的な力を備えていることが Moses のリーダーとしての悩みを解決していないことは示唆的である。Moses はリーダーとして他者に示唆を与えることはできても、人々の価値観を変えることは決してできない上に、個人によって違う意味を持つ“freedom”の価値を全員に保証することはできない。個人がその心を解放して自分の“horizon”を広げて新たな価値観に目覚めることができるかどうかは個人の努力と時代の経過にかかっているのであり、リーダーとしての限界を感じた Moses はその役目を終えるのである。

III “cross over” できない過去

Joshua と Caleb を Promised Land への調査にやった後、Moses は現在のイスラエル人たちは“wilderness”を生涯さまよう運命にあることと、現在より三代目の子孫の世代になって初めてイスラエル人は自由になることができることを確信している。Moses の予言が示唆するのは世代をかけなければ成し遂げることができない一つの民族の課題の存在である。つまり個人では“cross over”することはできないが民族というつながりで結ばれた複数の世代の存在によって“cross over”することができる問題があるということなのである。この Moses の予言が示唆することを黒人の苦難の歴史の文脈に置き換えて読み解くならば、奴隷としてアメリカへと連れてこられた黒人たちにおいてはどれほど自由を望んでもそれを叶えることができない世代が存在せざるを得なかったが、彼らの思いが子孫に引き継がれることで、のちの世代においてアフリカ系アメリカ人の民族全体の願望が成就されていくことになるのであり、そこには多様性を含みながらも民族全体で共有される課題があり、それが同民族としての意識と世代をつないでいるのである。

Moses が示す彼と同時代のイスラエル人の限界とその子孫による課題の達成についての予言は、自らを育んだ民族性とのつながりの中での自らの世代の意義、そして個人として自身が果たすべき役割の存在というものが照射されている。彼の予言は、人間は自らが属する、あるいは属することを選択した民族性とのつながりを“cross over”することがないゆえにその民族の過去がもたらす恩恵を受けながら、自らも民族の未来に対して果たすべき役割を担っているのだということを示唆しているのである。

結び

Moses が考える人間の内面の自由とは、他者から押し付けられた信念によってではなく自らの意志によって自身や民族の限界を突破し、その“horizon”を広げる行為に「自由」を感じ取ることができる状態と考えられる。そしてイスラエル人たちが理想の国家を建設することにおいて、苦労や犠牲に勝る自由を感じることを Moses は待つことになる。正解のない歴史の文脈の中で、自らの民族性や新しい国家のあり方をイスラエル人たちが選び、民族性の“horizon”を広げていく心の自由を持つ必要があることを Moses は感じていると言えよう。

Works Cited

- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*. Urbana and Chicago: Illinois UP, 1980.
- Hurston, Zora Neale. “Dust Tracks on a Road.” *Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*, edited by Cheryl A. Wall, New York: The Library of America, 1995. 561-769.
- . *Moses, Man of the Mountain*. New York: Harperperennial, 1991.
- . “Tell my Horse.” *Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*, edited by Cheryl A. Wall, New York: The Library of America, 1995. 277-555.
- Hutchison, Percy. “Led His People Free.” *Critical Essays on Zora Neale Hurston*, edited by James Nagel, New York: G. K. Hall & Co., 1998.
- Locke, Alain. “The New Negro.” *The New Negro*, edited by Alain Lock, New York: A Touchstone Book, 1997.
- Meisenhelder, Susan Edwards. *Hitting a Straight Lick with a Crooked Stick: Race and Gender in the Work of Zora Neale Hurston*. Tuscaloosa, Alabama: The University of Alabama Press, 1999.
- Sheffey, Ruthe T. “Zora Neale Hurston’s *Moses, Man of the Mountain*: A Fictionalized Manifesto on the Imperatives of Black Leadership.” *Critical Essays on Zora Neale Hurston*, edited by James Nagel, New York: G. K. Hall & Co., 1998.
- Wright, Melanie J. *Moses in America*. New York: Oxford UP, 2003.